

Title	朝鮮考古學研究(藤田亮策著, 高桐書院刊)
Sub Title	
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1951
Jtitle	史学 Vol.24, No.4 (1951. 4) ,p.131(571)- 134(574)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19510400-0131">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19510400-0131</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

朝鮮考古學研究 (藤田亮策著 高桐書院刊)

我國考古學研究の足跡を顧みる時、朝鮮に於ける業績が如何に大きなものであるかを今更のように痛感させられるのであるが、一定の根本方針に従つて、整然と調査の永續された點に於て、その出土品の驚異的であり、しかも世界的な意義を有する點に於て、まことに内地の調査では望み得られぬ成果が重ねられつゝあつたのである。しかも此の大事業が凡ゆる困難に打ち克つて、我々の先輩と少數の有識者の絶えざる努力によつてなし遂げられて行つたことは、從來の日本としては他に類例の乏しい、誇るに足る文化的功績と云うも過言ではない。本書の著者であり、今日日本藝文學部講師として大いに盡瘁されつゝある藤田亮策先生が、二十餘年間に亘り、朝鮮に於ける本格的な考古學調査の殆んど全部に關係し、陰に陽にその中心となつて活躍されたことも、また人の知る處であるが、惜しむらくは新しい重要な發見の續出と、あまりに惡條件と苦闘せられた結果であらうか、先生の朝鮮考古學に關する纏つた論攷は本書の卷頭を飾る二篇に片鱗を窺い得る

書評

外、殆んど見ることが出来ない。先生自ら序文に述べられた通り、先生と最も密に協力された梅原末治博士の著書が終戦後幾つか發刊されて、些かその缺を埋めていたとは云うものゝ、先生獨自の見解なり、主張なりは隨時發表された小論の中に求める外はない。それを一々搜索閲讀することが如何に至難であるかは云うまでもないことであるが、その主要なものが收められて居る本書の刊行は研究者はもとより、朝鮮の古文化に興味を有する人々とつて、この上もない福音と云わねばならない。

本書の内容は時代順に並べられた大小九篇の論攷より成る。即ち

朝鮮古代文化 (岩波講座「日本歴史」昭和九年)

朝鮮の石器時代 (東洋史講座第十八卷昭和十七年)

櫛目文様土器の分布に就きて (青丘學叢第二號 昭和五年)

大邱大鳳町支石墓調査 (朝鮮古蹟研究會 昭和十三年度古蹟調査報告)

朝鮮發見の明刀錢と其遺蹟 (京城帝國大學文學會論纂第七輯 「史學論叢」昭和十三年)

樂浪封泥攷 (小田先生頌壽紀念 「朝鮮論集」昭和九年)

樂浪封泥續攷 (京城帝國大學文學會論纂第五輯「京城帝國大學」創立五十周年紀念論文集・史學篇「昭和十一年

朝鮮及び日本發見の耳飾に就いて (京城帝國大學法文學會第二部論纂第三輯 「日本文化叢考」昭和六年)

(五七一) 一三一

通溝附近の古墳と高句麗の墓制

〔池内博士還曆紀念東洋史論叢〕  
昭和十五年

卷末圖版 二〇葉

以下簡単に内容を記すと、先づ巻頭の「朝鮮古代文化」は唯一の綜括的な研究であつて、舊石文化の存在如何に筆を起し、樂浪帶方の文化に及ぶ。發表年次はやゝ古い、簡にして要を得、特に半島の古代文化が決してシナ文化の直輸入ではなく、朝鮮独自の文化であることを強調され、ひいては我國の古代文化にその影響の著しいことを論ぜられた點は、やゝもすれば單に大陸文化の傳來と考へ勝ちな我々に、一層精緻な觀察の必要なことを教えられるのである。

「朝鮮の石器時代」は新しい發見が加えられて前稿の缺を補うと共に、一段と詳論されているから、石器時代に關しては、これによつて最近の知見を知ることが出來、我々の渴を醫するのである。しかも内地の石器時代との關係は我々に最も身近な問題であり、特に彌生式の源流に就いて、かなり明快な論述を下されている點、先生の貴重な實查體驗に基づく結論として、傾聽すべきである。

「櫛目文様土器の分布に就きて」。いわゆる櫛目文土器が北歐からシベリヤ、朝鮮へと、世界的な分布を持つことは顯著な事實

であるが、それが我國古代文化と如何なる關係を有するかは、これまた我々の重大な關心事ではなくてはならぬ。特に朝鮮に於けるその様相こそ、此の問題の重要な鍵である。前出の「朝鮮の石器時代」と併せ見るによつて、その大要、就中年代に關してさえも、かなり明瞭の度を加えられたことは我々の深く感謝せねばならぬ處である。更に此の問題は先生の最も興味を持たれて調査に努められた處であり、餘人の説き得るものでなく、貴重な文献と云わざるを得ない。

「大邱大鳳町支石墓調査」。北方ユーラシヤに於ける櫛目文土器に對して、南部ユーラシヤに跨る考古學研究の好對象は支石墓、即ちドルメンである。シナ本部、南洋方面にその確實な存在を聞かず、却てインドより飛んで滿洲、朝鮮に典型的な多數の例を見る點、最近に至つてよもやと思われた我國に於ても、北九州にその發見が報ぜられている今日、いよゝ研究の重要性が高まりつゝある。これも先生の特に努力を傾けられた問題であつて、その造詣はこの短い調査報告の中にも隨所に現れている。殊に半島のドルメンが從來漠然と石器時代と考えられていたのに對して、金石併用期の所産であることが確實となり、改めて西歐のそれとの關聯に考慮の餘地を與えられたのも見逃すことが出來ない。

朝鮮とシナとの交渉が何時まで溯るかは、東洋史上の大問題で

ある。平安南北道の山間僻地に、周秦時代のシナ文化の浸潤を示す明刀銭が確實に六ヶ所から、しかも多数発見されたことは重視されねばならぬ。「朝鮮発見の明刀銭と其遺蹟」は、これに關する論述であつて、特に明刀銭そのものに就いて精密な觀察記載の見られることは、遺物の失われたことが略々確實である今日、極めて貴重なものとなつてゐる。此の発見によつて、史記或は魏略の記載と併せ考えて、北部朝鮮に漢族の移り住んだのは意外に古く、いわゆる四郡設置の偶然に非ざることを示すものと論ぜられてゐる。

「樂浪封泥攷」「樂浪封泥續攷」。樂浪の遺蹟から発見された封泥は夥しい數に上り、その研究が漢代の歴史、制度、文化の各方面に亘つて大きな貢獻をなしたことは云うまでもない。此の二つの論攷に於て、先生は個々の遺物の觀察を基礎として、更に重要な新見解を多く提示されてゐる。

長鎖に垂下飾を附した耳飾は日鮮双方の古墳から見出され、兩者の文化關係を示す重要な遺品である。先生は洋の東西に亘る耳飾の概述に筆を起し、「考古學研究の立場から、此の平凡な小さい遺物をも精密丁寧に取り扱つて、形態の集成と製作上の特徴等を一つ宛まとめてゆかねばならぬことを提唱したい」と説き、日鮮兩者發見品の一々に細密な觀察を加えられ、最後にその源流に關しても廣く歐亞に亘つての考察を試みられた。

「通溝附近の古墳と高句麗の墓制」。通溝附近の古墳はかの好太王の陵を含み、その數も夥しく、石墳、土墳など構造の相違するものが混在して、好個の研究資料を提供してゐる。本稿は主要な墓のかなり詳細な説明に加えて、それ等の分布狀況、石墳と土墳との關係、漢墓の影響などを中心に、高句麗時代の墓制について縦横の論述がなされ、當時の文代研究上に多くの貢獻が見られる。

卷末の圖版二〇葉は未發表のものが多く、内容に關係あるものを網羅し、鮮麗なコロタイプ印刷によつて本書の價値を高めてゐる。

要するに本書を形づくる各論文は發表の年次にも遲速があり、各個獨立したものとはいへ、先生の長年に亘る在鮮間に於ける調査研究の成果が凝集したものであり、他人の企て及ばない独自の境地を開いてゐるのである。併しながら、それが首尾一貫した朝鮮古代文化の研究成果に非ざる以外に、なお遺憾の點もないではない。先生自らの言を借りれば、「日進月歩の考古學界に往年小論斷章は殆んど利益するところなく、大半改筆の要あるもののみで恥を後世に遺すものと思ふ（序文の一節）。勿論先生の謙讓の辯と云うべきであるが、同時に親しく承る所によれば、最近數年間、に於ける新しい發見は、これまた從來の豫想を遙かに越えるものがあつたとのことである。此處に於て、何人と雖も新たな著作

を先生に期待するであろうが、最大の不幸は記録、寫眞、實測圖等、一切の資料が先生から失われ、遺物すらも今回の動亂によつて恐らくは無に歸して、その望みが殆んど絶ち切られていることである。本書の價値は此の點から見て、新たな意義を増すのであるが、それにつけても正しい平和の到來を衷心より祈念せずには居られないのである。

終りに臨んで、これ以上蛇足を加える必要はないが、たゞ筆者は朝鮮の考古學研究に携つたこともなく、紹介者としての資格を缺き、或は却て平素高恩を受けつゝある先生の原著を傷つけることのあるのを恐れつゝ、拙い紹介の筆を擱く次第である。

(清水潤三)

### 圖書寮典籍解題

#### 歴史篇

(宮内廳書陵部編  
養徳社發行)

永年、歴史家に親しまれた宮内省圖書寮の名稱は、今次の官制の大變革にあつて諸陵寮と合併して宮内廳書陵部となつたが、その書庫は幸に圖書寮文庫と稱して、その名稱を存し、從來の通り貴重な文書記録類を保存するのは誠に喜ばしい。

この圖書寮文庫には周知の通り、皇室尙藏のもの、外に、桂宮・伏見宮より、鷹司・柳原・白川・土御門など舊公家より、壬生官務・平田出納兩家など舊職掌の家より引繼、献納、購入のもの、

更に明治中期に秘閣より引繼の金澤文庫―富士亭文庫―紅葉山文庫舊藏のものを主として、和漢の珍籍稀書が多數に藏されて、從來世の學究者、書籍愛好の識者がその公開を念願していた。然るところ幸にも終戦後二十一年以來略ぼ毎月上旬公開の展示會を催し、進んで秘庫の逸品を出陳して好文の士の研究に便宜を圖ることとなり、且つその出品に夫々慎重な解題を附し、更に例月の出陳品を綜合した書誌學的説明を掲示し觀者の指南に供している。昨年この解説を整理補訂して文學篇を上梓し、今次その歴史篇を印行した。

この歴史篇は、撰史・日記記録・古文書・系圖に大別し、その初頭には夫々總説を設け、更に終末に書誌學の概説と索引を附載し、頗る用意周到なものである。

次に本書中、筆者の拜觀してめぼしきものと思われたもの若干を掲げて見ると、

日本書紀(七帖)飯田武郷の日本書紀通釋に禁中本と記しているもので、その神代の卷、奥書に「興國七年十一月十三日授參議右大辨兼右近衛權中將朝臣單、一品儀同三司」とあるもので、故八代國治博士などは一品は親房で、中將朝臣は其の子顯信とし、然もこれを親房の自筆と云われていたが、編者の記す通り自筆とするにはなお研究を要するものである。

本朝世紀(二十四卷)―伏見宮の傳藏本、鎌倉時代の書家にか